日本建築学会九州支部研究報告
第43号　2004年3月

ロタ・ソンソン地区に残る日本委任統治時代の建築物
－戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究　その10－

正会員○辻原万規彦[*1]　同　今村仁美[*2]

9．建築歴史・意匠－2．日本近代建築史
南洋群島，南洋興発，実測調査，工場，病院

1．はじめに

一連の本研究は，戦前期の南方諸地域を対象として，1）そこで行われた日本人による建築活動の実態，2）当時用いられた室内環境調整手法の実態，3）戦前期日本の「南方進出」の技術的側面，特に建築活動の側面，を明らかにすることを目的としている[注1)]。

筆者らは，これまでに戦前期の南洋群島における建築組織[1)]や建築物の床下の構造[2)]ならびに建築技術の伝播[3)]についてのほか，ヤップ[4)]，サイパン[5)]，テニアン[6)]ならびにパラオ[7),8)]に現存する建築物について報告した。

これらに続いて，本報では，2001年7月と2003年3月に行った現地調査の結果を基に，北マリアナ諸島ロタ島ソンソン地区における日本委任統治時代の建築物の残存状況を報告すると共に，幾つかの建築物についての実測調査の結果を報告することを目的とする。

なお本報では，当時の用語や呼称をそのまま用いた。

2．ロタ島ソンソン地区に残る日本委任統治時代の建築物

日本が南洋群島を委任統治するために1922（大正11）年に設置した南洋庁には，地方行政のために，パラオ，サイパン，ヤップ，トラック，ポナペならびにヤルートの各支庁が設けられていた。このうちサイパン支庁の管轄区域内にあったロタ島には，1937（昭和12）年8月にサイパン支庁ロタ出張所が置かれた[9)]。

ロタ島ソンソン地区に残る日本委任統治時代の建築物を示す図1は，1983年現在の地図[10)]を基に，戦前のロタ在住の方々による1944（昭和19）年6月以前の復元地図[11)]と1943年当時の地図[12)]を重ね合わせ，さらに2001年7月と2003年3月の現地調査結果と日本委任統治時代の街並みなどが写された写真などを用いて作成した。ただし，地図は未だ完全なものではなく，地図に挙げたもののほかにも，いくつかの建築物などが残っていると考えられる。

日本委任統治時代の建築物の遺構のうち，比較的規模が大きなものは，旧南洋興発株式会社ロタ製糖所のボイラー室と煙道ならびに旧南洋興発株式会社ロタ製糖所附属医院などである。そのほかに，旧ロタ小学校の門柱や旧南洋庁サイパン支庁ロタ出張所の擁壁などが確認された。なお，ロタ島内には，図1で示したソンソン地区以外にもいくつかの日本委任統治時代の建築物が残存している。

3．旧南洋興発株式会社ロタ製糖所の遺構

南洋群島で最大の企業であった南洋興発株式会社は，まず，サイパン島に製糖工場を建設して製糖事業を開始した（1923（大正12）年3月）。その後，1930（昭和5）年1月にはテニアンに建設した工場（第一工場）も操業を開始し，1934（昭和9）年12月には第二工場も竣工した[13)]。南洋興発株式会社の4つ目の工場となるロタ製糖工場は，1934（昭和9）年8月に起工し，翌1935（昭和10）年12月に竣工した[14),注2)]。

図2に，2001年7月に実測調査を行ったボイラー室と煙道の遺構の平面図と立面図を示す。また写真1に2003年3月の現況を示す[注3)]。

ロタ製糖所の建設の様子を撮影した写真が残っており，「バガス用及石灰（ママ）燃焼用汽罐五基」[14)]と煙道の煉瓦積みの様子が分かる[15)]。この汽罐5基のうち現存しているのは，3基のみであった。一方，煙道はほぼ完全な形で残っていたが，煙突は現存していなかった。

また，2001年の現地調査の際に，汽罐部分は「SHINAGAWA」と刻印された耐火煉瓦で積まれていることを確認した。この耐火煉瓦の移入を直接裏付ける資料は未見であるが，1927（昭和2）年に台湾の鹽水港製糖株式会社のボイラーを築造するなどの実

Old Japanese buildings in Songsong Village of Rota island under the Japanese mandate
- Studies on the building activities of Japanese architects and their control of indoor environment in Oceania and Southeast Asia under the Japanese administration Part 10 -
TSUJIHARA Makihiko and IMAMURA Satomi

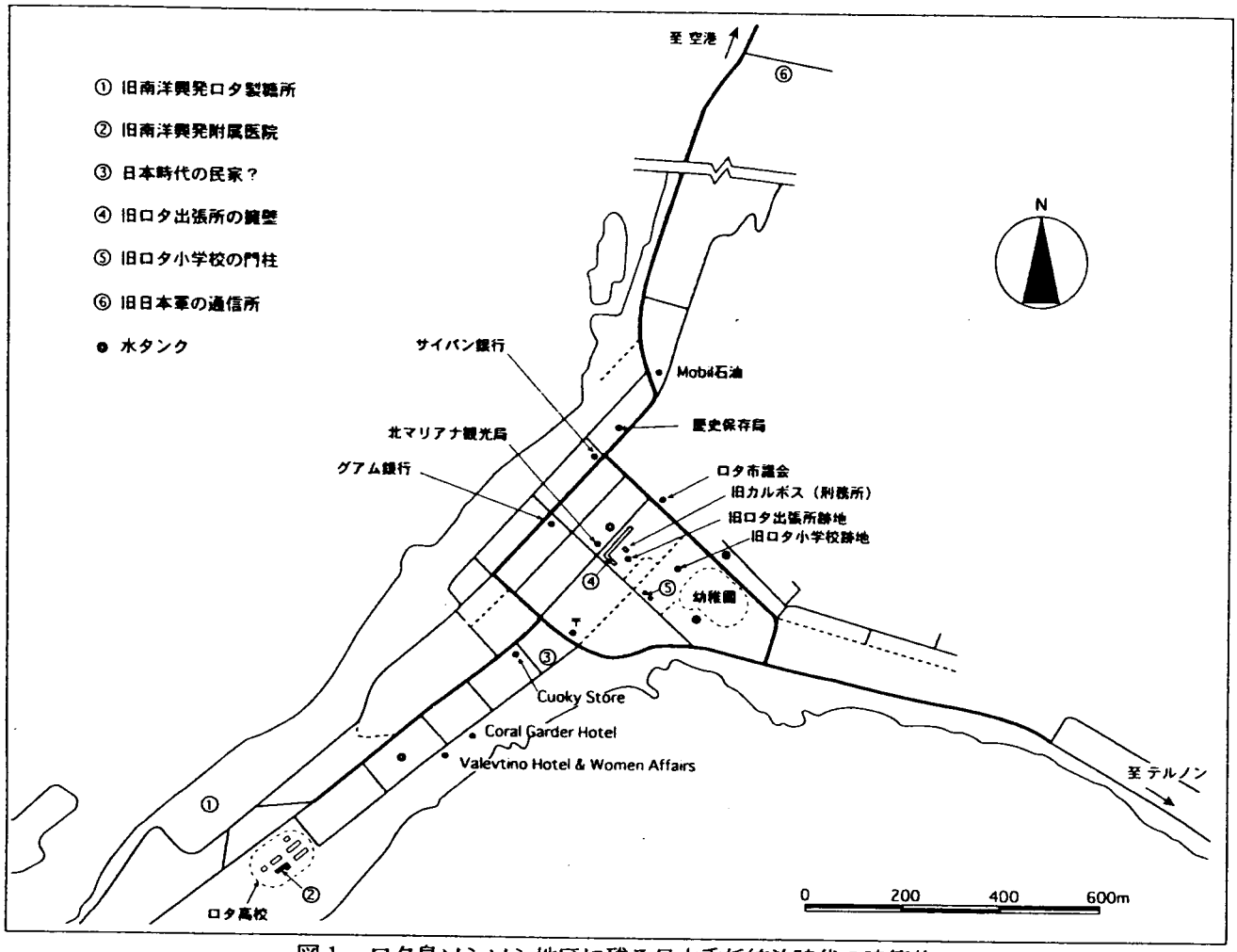

図１　ロタ島ソンソン地区に残る日本委任統治時代の建築物

績があった[16] 品川白煉瓦株式会社製のものと考えられる。なお，工場そのものの設計者や施工会社などの詳細は不明であり，今後の課題である[注4]。

４．旧南洋興発株式会社ロタ製糖所附属医院の遺構

南洋興発株式会社は，従業員の労働能力の向上のために，会社独自の衛生施設として，サイパンとテニアンの製糖所の近くや農場内に医院や分院を設けた[17]。ロタでも，同様に，製糖所の近くに医院（医務室と呼ばれることもある。）１個所，療養所１個所，さらに島内各所に分院を３個所設けた[14]。

図３に 2003 年３月に実測調査を行った旧南洋興発株式会社ロタ製糖所附属医院の遺構の平面図と立面図を示す。また写真２に 2003 年３月の現況を示す。

建物は，海のそばの高台に位置し，南東側に傾斜した敷地に建てられており，図２中のＡ断面側の入口とＢ断面側の入口にはレベル差があった。外壁は，ほぼ当時のまま残っていると考えられ，全体を通して装飾は少ないが，腰石を張っているのが特徴的であると考えられる。

この附属医院の設計者や施工会社などは現在のところ不明である。建設年代については，1937（昭和 12）年６月発行の文献18）の口絵に「ロタ製糖所附属醫務室内部」と説明された写真があることから，それ以前と考えられ，製糖所建設と同じ頃，もしくはその直後に建設されたと考えられる[注5]。

なお，サイパンとテニアンの製糖所附属医院については，遺構は現存しておらず，外観の写真が残っているのみである[19], [20]。写真からは，これら３つの附属医院の建物は同一の平面ではなく，設計者も異なっていると考えられる。一方，南洋庁が設置した官立の病院としては，これまでに，サイパン，パラオ，チューク（旧トラック）の各医院の遺構が確認されている。これらとの比較については今後の課題である。

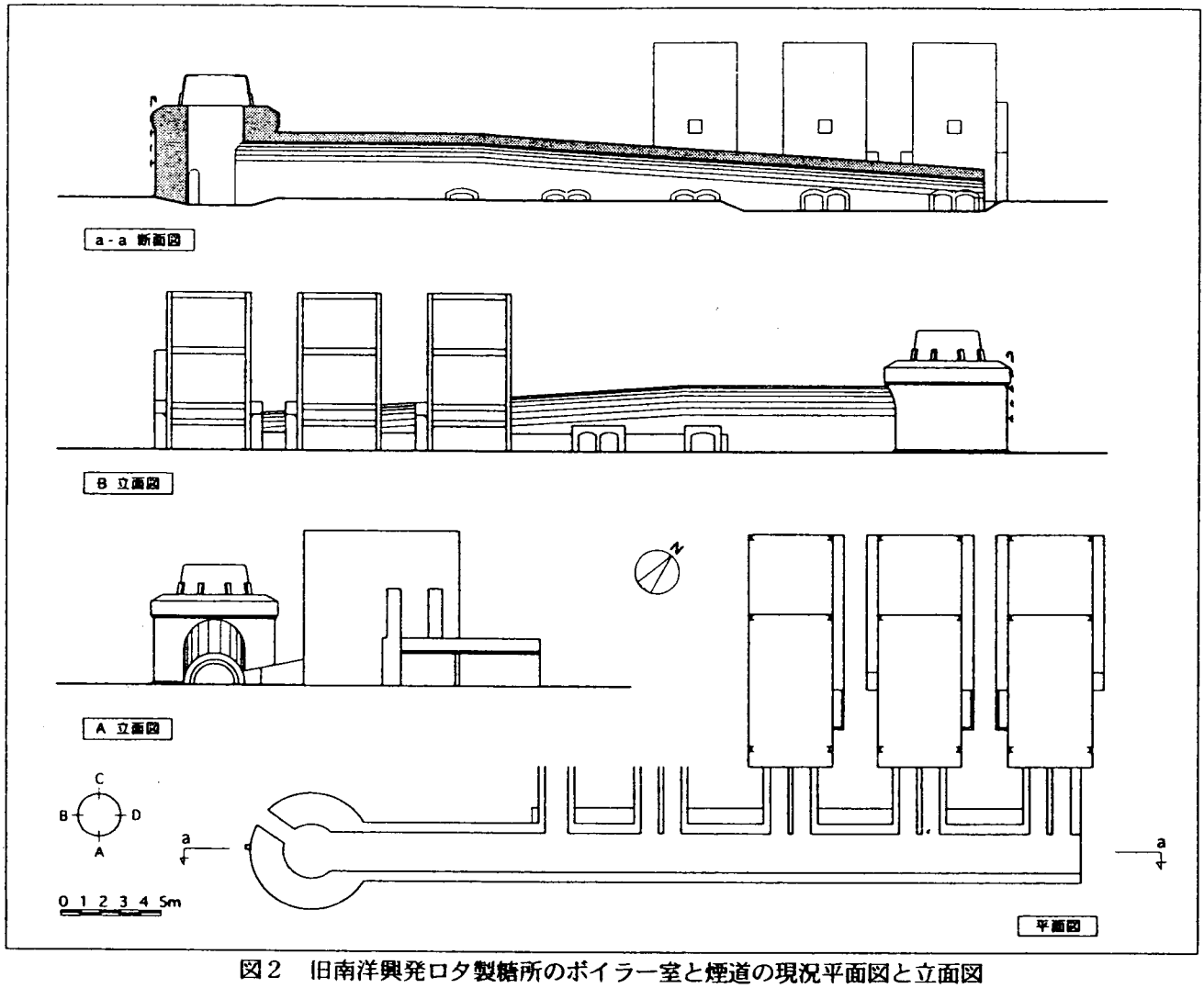

図２　旧南洋興発ロタ製糖所のボイラー室と煙道の現況平面図と立面図

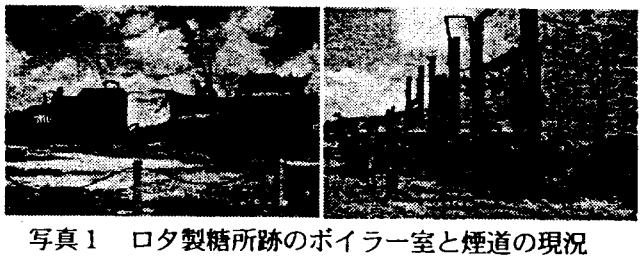

写真１　ロタ製糖所跡のボイラー室と煙道の現況

５．まとめ

本報では，現地調査の結果を基に，ロタ島ソンソン地区における日本委任統治時代の建築物の残存状況を報告し，旧南洋興発の工場と附属病院の遺構の実測結果を示した。残存状況を示す地図には不十分な点があり，建築物自体についても検討すべき課題が数多く残っている。今後，さらに研究を進めていきたい。

謝辞：旧南洋興発ロタ製糖所附属医院の実測調査にあたっては，北マリアナ諸島政府社会文化省歴史保存局副歴史保存官の Lon Bulgrin 氏，ロタ駐在の Eloy M. Ayuyu 氏ほかスタッフの皆様にご協力頂いた。資料収集ではアジア・太平洋資料室の山口洋兒室長に，情報収集では太平洋学会の中島洋専務理事にご助力頂いた。なお本報の一部は，平成 13～14 年度科学研究費補助金（奨励研究（A），若手研究（B），課題番号 13750557）と平成 13 年度（第 39 回）三島海雲記念財団学術奨励金によった。記して謝意を表する。

＜脚注＞

注１）本研究全体の枠組みの詳細は，本報と同タイトルの「その１」（建築学会九州支部研究報告，第 40 号・２，pp.129～132，2001.3）を参照のこと。

注２）ただし，1939（昭和 14）年４月には製糖を中止し，酒精，合成酒，雑酒の製造工場に転換され，翌 1940（昭和 15）年 10 月から操業を開始した[10]。

注３）2002 年末の台風の影響などで，2001 年７月の調査時よりも遺構の崩壊が進んでいた。本稿で報告した建築物をはじめとする旧南洋群島に残る日本委任統治時代の建築物は貴重な文化遺産と考えられ，保存などの対策が必要である。

注４）工場建設の経緯については文献21）などにも述べられている。

注５）この「附属醫務室」と実測調査を行った建物は同一のものと考えられるが，外観の写真は未見であり，確証はない。

＜参考文献＞

1）戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関

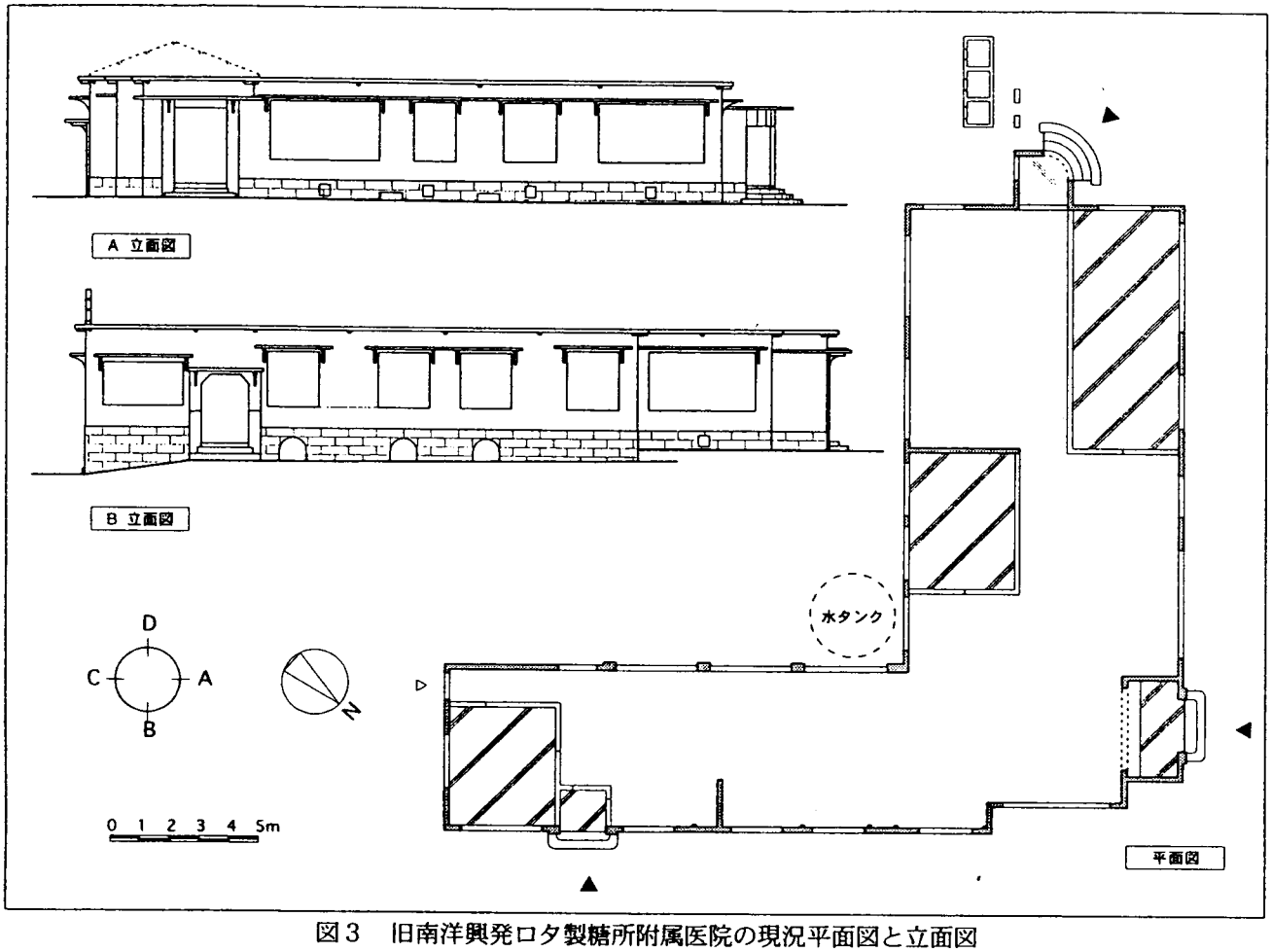

図３　旧南洋興発ロタ製糖所附属医院の現況平面図と立面図

写真２　ロタ製糖所附属医院の現況

する研究　その２，建築学会九州支部研究報告，第 40 号，pp.633～636，2001.3.
2）同上タイトル　その４，同上，第 41 号，pp.417～420，2002.3.
3）同上タイトル　その５，同上，第 41 号，pp.421～424，2002.3.
4）同上タイトル　その３，同上，第 41 号，pp.413～416，2002.3.
5）同上タイトル　その６，建築学会関東支部研究報告集 II，第 73 号，pp.453～456，2003.3.
6）同上タイトル　その７，同上，第 73 号，pp.457～460，2003.3.
7）同上タイトル　その８，建築学会九州支部研究報告，第 42 号，pp.609～612，2003.3.
8）同上タイトル　その９，同上，第 42 号，pp.613～616，2003.3.
9）外務省条約局法規課編：委任統治領南洋群島　前編（「外地法制史」第五部），外務省条約局法規課，pp.209～210，1962.12.
10）United States Geological Survey: Topographic Map of the Island of Rota (Luta), United States Geological Survey, 1983.
11）沖縄ロタ会監修，永田一編集・製作：昭和 19 年（1944）６月 11 日炎上前のロタ住宅地図①，1998.1（沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編：沖縄県史　資料編 17　近代５　旧南洋群島関係資料　附録⑦，沖縄県教育委員会，2003.3.）.
12）Mark R. Peattie: Nan'yo -The Rise and Fall of the Japanese in Micronesia 1885-1945, University of Hawaii Press, p.169, 1977.5.
13）武村次郎：南興史（南洋興発株式会社興亡の記録），南興会，pp.78～98，1984.5.
14）南洋興發株式會社ロタ製糖所：ロタ製糖所概況　燐砿課概況，南洋興發株式會社ロタ製糖所，1938.6.
15）具志川市史編さん室編：具志川市史編集資料 13　写真集　南洋群島の製糖とくらしー沖山策写真アルバムよりー，具志川市教育委員会，pp.40～41，p.58，2002.3.
16）品川白煉瓦株式会社社史編纂室編：創業 100 年史，品川白煉瓦株式会社，p.508，1976.12.
17）具志川市史編さん室編：具志川市史　第四巻　移民・出稼ぎ論考，具志川市教育委員会，p.590（この項の著者は今泉裕美子），2002.3.
18）南洋興發株式会社：南洋開拓と南洋興發株式会社の現況，南洋興發株式会社，1937.6.
19）南洋協會南洋群島支部：日本の南洋群島，南洋協會南洋群島支部，p.307，1935.12.
20）沖縄テニアン会：記念誌はるかなるテニアン，沖縄テニアン会，pp.78～79，2001.10.
21）中西由松：サイパン，テニアン，ロタの思い出，『南興連れ連れ草』（南興誌刊行事務所編，南興連れ連れ草の集い），pp.25～30，1986.11.

*1：熊本県立大学環境共生学部　助教授・博士（工学）　Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
*2：アトリエ イマージュ　Atelier Image